

社会における音楽家の新たな役割と スキルについての一考察

—第18回NETMCDO(NYC)会議の講演者・主催者の事例の紹介を通して—

The Changing Role and the Need for additional Skills of
Musicians in Various Social Contexts

大 類 朋 美

Tomomi Ohroi

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

昨今の音楽家を取り巻く社会情勢の変化に伴って、同時に複数の仕事を持ち、職場や仕事内容を少しずつ変化させる流動的なキャリアパターンを歩む音楽家¹⁾が増えている。同じポジションに生涯就く音楽家は少なくなり、自営で仕事をしたり、地域社会とグローバル社会の両方に身をおいて仕事をしたりする音楽家が増え、音楽家の活動範囲は広がりをみせている。

こうした現状の中で、単に演奏技術が優れているだけでは、音楽家が仕事に従事し、その仕事を保持できる保証にならなくなっている。今まで一般的だとされていた進路は狭まり、若い人達が前の世代の音楽家の通って来たキャリアをそのままモデルにしても、仕事につながらなくなっている。

日本の音楽大学では、4年生になると会社説明会や面接に足を運び、一般の大学の学生と同様に就職活動を行ったり、中学校や高等学校に音楽科の教育実習生として赴いたりする学生が多くいる。きちんとした目的意識があって一般企業で働いたり、学校での音楽科教員を希望したりする学生もいるが、学生の多くは本当にやりたい仕事をみつけられないまま、目の前に提示された限られたオプションとして、就職活動や教育実習をこなしているのではないだろうか。

そうした現状の変遷に対応すべく、国内外の音楽大学では、従来にはなかったかたちのキャリア教育を推進するようになってきている。本稿の2-2で紹介するアンジェラ・ビーチングは、マンハッタン音楽院のアントレプレヌール・センター長として、長年従事して得たキャリア支援活動の成果をBeyond Talent (ビヨンド タレント) にまとめた。我が国でも、国立音楽大学の音楽学の教授である久保田慶一は、著書『音楽とキャリア』²⁾の中で、今後音楽大学が歩むべき道を提案している。両者とも、音楽家のキャリアは今後の、社会の多様な価値観に対応して多様化していることを直視し、音楽大学におけるキャリア教育が、より充実していくことと共に、新しい音楽家の技能を身につけていくことの大切さと唱えている。

昨今の動向として、他の職業分野とのコラボレーションにより、今までにないかたちの仕事を見出す音楽家が増えてきている。そうした動向においては、音楽家の新たな職能として、音楽家が福祉の場に出向いて演奏を行ったり、初等教育現場との連携を図って活動をしたりするなど、社会のあらゆるコンテキストで活躍できる音楽家の新たな技能を模索する必要があるだろう。

日本でも、近年はクラシック音楽をホールまで足を運び、聴きに来る少ない人口だけをターゲットにするのではなく、新しい観客層を開拓するアウトリーチが定着しつつある。今日の現状は、音楽家が地域社会の様々な機関や組織の「パートナー（対等な仲間）となり、関係を結んでいく」³⁾地域活動へ発展する段階へと移行しつつあるといえる。こうした現状を鑑みれば、音楽家のキャリアを形成していくには、芸術のスキルを高めるだけではなく、社会との接点を作り出すスキルが必要となっていると言える。それでは、どのような技能、あるいは態度を身につける必要があるのだろうか。

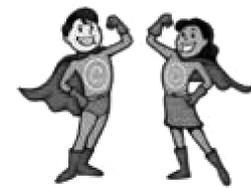
本稿では、こうした音楽家に社会と接点を作り出す新たなスキルが求められる現状を踏まえ、社会の変化に対応できる音楽家の養成に力を注いでいる研究者やカウンセラーの先導的な事例を紹介することを通して、次の課題に取り組む。まず事例をもとに音楽家と社会との新たな接点を探り、これからの音楽家の新たな役割についての考えを深める。そして、その考えを基に、今後音楽大学において、どのような授業を展開していくことが未来の音楽家の育成に繋がるかについて考察を加える。

1-2 研究の方法

2013年1月9日と10日に、第18回NETMCDO（Network of Music Career Development Officers: 音楽キャリア開発オフィサー連絡会）⁴⁾が、ニューヨークのマンハッタン音楽院で開催された。今年の会議のテーマは「変化の仲介者としてのアーティスト」（Artists as Change Agent）であった。「変化の仲介者」とは、ティーチングアーティスト⁵⁾、アントレプレナー⁶⁾、アントレプレナーシップやアートマネージメントの授業担当者の他、音楽で新しい取り組みを何かしら始めようとするすべての人を指す。本稿は、会議の基調講演者や主催者の中から、音楽大学において社会との関わりをつくるキャリア教育や実践的研究を推進している3人、すなわち、ジェームス・アンダーコフラー、アンジェラ・ビーチング、ライネッケ・シュメルデに焦点をあて、会議での発表をベースに、それぞれのウェブサイトや論文、著書等を参考にしながら、それぞれの考え方に触れることで、音楽家と社会との新たな接点を探るための指標とする。

1-3 NETMCDO (2013) について

18年前に設立されたNETMCDOは、毎年規模を拡大させ、年々参加者が増加している。今年はアイデア・マーケットと呼んで、オープンスペース（Open Space Technology）⁷⁾のメソッドを用いた会議の進め方を取り入れ、十分な情報交換ができるような工夫されていた。議題として上がっていたのは、「キャリア支援の授業内容について」「インターアクティブパフォーマンス：準備、教え方、プログラミング等」「従来の音大体質をもっとアントレプレナーシップに向かせるには？」等があった⁸⁾。会議の最後は、代表者が終わりの言葉を述べるなどして締めくくられるのが通常だが、



今回は会議のテーマ「変化の仲介者としてのアーティスト」のロゴ（左のイラスト参照）になっていたスーパーマン（ウーマン）の赤いマントを順番に羽織って、参加者全員が一言ずつ感想を言うように演出され、至る場面で参加者が積極的に関われるように工夫されていた。

2 事例紹介

ここでは、アメリカの音楽大学におけるアンダーコフラーとビーチングの音楽家のキャリア形成に関わるアントレプレナーシップの取り組み、およびヨーロッパの事例として、ライネッケ・シュメルデの所属する研究プロジェクトグループの活動について報告したい。

2-1 ジェームス・アンダーコフラー（James Undercofler）

1) アンダーコフラーの紹介

ジェームス・アンダーコフラーは、フィラデルフィア・オーケストラの最高経営責任者やイーストマン音楽院の学部長を歴任した経歴を持つ。現在、マリーランド大学のナショナル・オーケストラ協会の芸術監督を務めると共に、一般総合大学（エセカ・カレッジ）の中に「芸術における起業」という修士課程が取得できる新しい大学院のコースを設立することに大きく寄与した。常に新しいポジションにおいて、新たなシステムをつくったり、既存のシステムを動かしたりすることが出来る人物である。

会議では、イーストマン音楽院に所属していた頃、ヨーロッパの音楽大学との大学院提携プログラム⁹⁾にアメリカの音楽大学として加わる計画を推進していたことや、総合大学の中の音楽学部として、ビジネス的な側面とどう関わっているか等を紹介していた。

アンダーコフラーは、自身のウェブサイト¹⁰⁾に定期的に、クラシックの音楽を取り巻く情勢についての記事を載せ、厳しい意見や提言を掲載している。音楽の他、ビジネス、経済、行政といった多角的な視点からの彼の分析は大変興味深い。

彼の視点をいくつか紹介する。アンダーコフラーはブログの中で、クラシックの音楽の世界における需要と供給のアンバランスについて触れ、供給ばかり多くて、需要が追いついていかない現状を次のように言う。「需要側を見込んだ様々な工夫をこらした真剣な取り組みが、未だ見当たらない。〔中略〕芸術との関わりが、幼い時期からあるかないかが、大人になってからの芸術との関わりを左右するのは明らかだが、プロの音楽の世界と「K-12」（幼稚園から始まり、高等学校を卒業するまでの13年間の教育期間）の芸術教育の世界との隔たりが大きいことは、需要と供給のアンバランスに起因している」¹¹⁾。

別の例として、組織が成長し規模が大きくなった場合に生じる問題については、次のように書いている。組織が大きくなり、その規模を拡大化すると「規格化されたプランニングが増える。大所帯がいかに存続し、継続していけるかが主目的となるため、芸術的な表現の質に価値を置くことから遠ざかる傾向がある」¹²⁾。「規模の拡張」vs「質の向上」という構図ができたときに、それぞれの組織のミッションが問われる大事な選択事項について、言及されている。

2) 大学におけるアントレプレナーシップの授業の実情について

音楽家が社会の中で活躍できる場所を探すとき、こうした実社会の諸問題と向き合うことを避けて通ることはできない。音楽の現状を考えた上で、音楽家が積極的に社会と関わり、起業家のような企画力

や計画性を身につけることは、長い音楽キャリアを形成するために不可欠である。こうした起業家精神を、アントレプレナーシップと呼び、音楽大学においてもその重要性が広がりつつある。そうした現状を踏まえ、アンダーコフラーは、現在ドレックセル大学でアート・アントレプレナーシップ（Arts Entrepreneurship 芸術家の起業能力）の授業を教えている。アントレプレナーシップ教育の認知度は高くなったものの、まだまだこの科目を十分に教えられる教員が不足しているとアンダーコフラーは言う。そして、現存するアントレプレナーシップ教育を、2つのタイプに分けられると分析する。

「1つ目のタイプは、どうしたら学生の活動を商品化できるか、卒業後もプロとして活動できるようにサポートするものである。[中略] これは、キャリア・サービスを発展させたようなもので、本当のアントレプレナーシップとは言えない」¹³⁾。具体的には、学生の室内楽やアンサンブルグループのレパートリーを考えたり、対象となる観客層の絞り込みをしたり、オフステージでの催しを学ぶためのものである。

2つ目のタイプは、社会のニーズに焦点をあてたソーシャル・サービスの側面を含んだものを指す。「自分を売り込むことを目的とする自己中心的なものではなく、マーケットの需要と地域社会のニーズをリサーチ」¹⁴⁾した上で、音楽家がどのようなものを提供できるかを探るものである。地域の人々と芸術との接点を見つけ、そこに新たな価値を見つける本当の意味のアントレプレナーシップがこのタイプに分類される。

社会のニーズを考えて、地域に密着したアントレプレナーシップ教育が進む一方、従来のカリキュラムにアントレプレナーシップ教育を導入することに反対する教員はアメリカの大学にも、まだ数多くいるようだ。アンダーコフラーはそのような反対派のことを次のように語る。「大抵そのような大学教員は、大学は起業の場所ではなく、また芸術のスキルを習得することこそが、成功への道だと唱える。こうした意見は最も手に負えない馬鹿げた議論だ。今こそ、本当のことを打ち明けるときだ」と¹⁵⁾。

「本当のこと」とは、音楽大学卒業後の音楽キャリア形成が大変厳しい現実のことだと容易に推測できる。アンダーコフラー氏は、このような厳しい現実と向き合って、学生にアントレプレナーシップ教育を施し、そうした教育を受けた人材が地域社会との新たな繋がりを構築して、芸術の社会全体の中での立ち位置を示していくことの重要性を唱えている。そして、音楽と経済、行政といった多方面での連携を推進し、一般大学の他の分野との関係性を構築する活動を続けている。

2-2 アンジェラ・ビーチング (Angela Myles Beeching)

1) ビーチングの紹介

四 アンジェラ・ビーチングは、インディアナ大学やニューイングランド音楽院でのキャリア・サービス関連の仕事を経験した後、現在はマンハッタン音楽院の音楽アントレプレナーシップ・センターを統括している。Beyond Talent¹⁶⁾の著者でもあり、実習や演習型のコーチングやコンサルティングを通して、学生や卒業生が自らの成功の道筋をつくる手助けに人並み外れた情熱を注いでいる。ビーチング氏の活動は、音楽家がキャリアや新しいビジネスモデルを形成するにあたって、ではいったいどこから着手したらよいのか、何をどう準備すればよいのか等の質問に答える材料を豊富に提供している。

2) ビーチング氏のアントレプレナーシップの授業の報告

今回の会議にはビーチングの講演はなかったが、彼女のアントレプレナーシップの授業を聴講させてもらったので、授業の内容についての報告をする。ビーチングが担当する授業には、学部生向けの Practical Foundation: Entrepreneurial Leadership Skills（実践的基礎づくり：起業リーダーシップのスキル）と、大学院生向けの The Advanced Practicum in Music Entrepreneurship（上級者向けの音楽による起業実習）がある。

「今日の実社会に耐えうるキャリアを積むために、音楽家は芸術的に優れているのみならず、起業的なスキルが必要である」¹⁷⁾と、ビーチングは考える。そのために、1セメスターのこれらのクラスでは、リーダーシップのスキルや起業のスキル（具体的にはコミュニケーション、財務、自己プロモーション、広報、マーケティング等）を養成し、自分独自の領域を見つけることを目的としている。

彼女の授業では、参加者からのインプットが授業の中身を左右するので、学生の積極的な関与を重視している。学生はプレゼンテーションを用意し、それに対して学生同士がコメントしたりディスカッションをしたりし、お互いによりフィードバックをすることが求められる。そこでの関わり方が、そのまま成績にも反映される。

聴講した授業の中で、ビーチングは20数名の学生全員に意見を求める場面が数回あった。彼女は学生一人一人に注意を払いながら授業を進め、時にはクラス内をぐるぐると歩き回りながら話を進めるなどして、学生の意識が授業に向けられるように工夫していた。

セメスターの最後には、個々の学生の長期的な計画をベースにしたキャリア・プロジェクトをレポートとして提出することになっている。その準備段階として、大きく分けて次の3つの提出物が課せられる。

- ①ヴィジョン・エッセイ（自分の音楽活動の目的設定／将来構想計画書）
- ②略歴（就職活動に使う履歴とは異なり、夫々の活動に応じたもの）
- ③実習の成果（参考文献や資料等のリサーチや関係者とのインタビューを通して学んだことに対する反省、意見、感想等）

ビーチングはこの授業の補佐的な存在であるケーシー・ダンと共に、授業後の振り返りの感想文等を含めて、ほとんど毎回の授業の後に回収する学生からの提出物すべてに目を通し、コメントや手直しをして学生に戻している。

ビーチングの授業シラバス（2013 Springセメスター Practical Foundation: Entrepreneurial Leadership Skills）を彼女の許可の下、次ページに掲載する（表1）。

ビーチングは「音楽家の多くが、自分のキャリア課題について、これまで知識豊富なプロと話し合ったことがないのです。音楽での職をある程度確保できているアーティストですら、音楽産業の『ビジネス』の部分とどう関わったらいいかというような実用的な情報を得るのが大変です。〔中略〕音楽で仕事をしていくための技術や情報を、いきあたりばったりのやり方で身に付けているのです。そして、不運なことには、自分の力でチャンスをつかむ技術や情報を得られぬまま、プロの世界で自分の位置を確立し損ねているのです」¹⁸⁾と、著書の中で語っている。

シラバスをみると、授業開始の初期段階に「何故音楽をするのですか？」や「目標設定」の授業がある。ビーチングは「自分にとって音楽は本当はどんな存在なのだろうか」「自分にとっての成功とは、

表1 ビーチングの授業シラバス

日程	要 旨	宿 題
1/11	導入	教科書(ビヨンド・タレント)の購入とpg. 1-9(ページ数は2010年改訂原語版に基づく)までを読む。
1/16	何故音楽をするのですか?	教科書pg. 141-149を読む。
1/18	創造性	エル・システムのビデオをみる。 http://bit.ly/EISistema - CBS
1/23	ミッション声明文(目標設定)	教科書1章「成功への道を計画する」pg. 9-20を読む。
1/25	独自性、革新	ヴィジョン・エッセイを書く
1/30	略歴:あなたは誰ですか、関心を持たれるべき存在ですか?	教科書3章「イメージづくり」pg. 45-67を読む。
2/1	ネットワークづくり	教科書2章「人脈、人間関係づくり」pg. 21-44を読む。
2/6	略歴のフィードバック	自分の略歴の草稿を持参すること。授業内で建設的で有用なフィードバック交換する。
2/8	効果的なインターネットでの売り込み、キャリアづくりの活用方法	略歴
2/13	実習・演習型キャリア/プロジェクトの企画	教科書11章「人生のバランス:お金と時間」pg. 274-294を読む。
2/15	予算/財務マネージメント	プロジェクト案の考案(オンラインでアンジェラかケーシーとの30分程度の予約を入れる)
2/20	メディアを利用した宣伝や広告・情報交流	教科書7章「評判を上げる、お客を付ける:メディアや広報の活用法」pg. 177-201を読む。
2/22	助成金	教科書12章「プロジェクト実現のためのファンドレイジング(資金調達)」pg. 295-304を読む。
2/27	ファンドレイジング	教科書12章 pg. 304-320を読む。
3/1	コミュニティー・エンゲージメント	プロジェクト計画の一環として、マインドマッピングの手法を使って、アイデアを発展してみる。 http://bit.ly/MindMapping -(4 min.)をみる。
3/20	自分の演奏のプロモーションをする	教科書5章「インターネット上でのプロモーション、ウェブサイトの有効性を見積もる」pg. 123-140を読む。
3/22	ティーチングアーティスト	教科書8章「聴き手をひきつける」pg. 202-220を読む。
3/27	インタビュー結果の報告	インタビュー
3/29	リサーチの技術	オンラインリサーチについてのビデオをみる。 http://bit.ly/MusicBizJobSearch グーグル・スカラー http://bit.ly/GoogleScholarSearch グーグル・アドバンスサーチ http://bit.ly/GoogleAdvanced
4/3	契約書	教科書10章「フリーランスの成功方法」pg. 253-273を読む。
4/5	プレゼンテーションの技術	これまでのプロジェクトの最新版を提出。
4/10	関係をつくる	パブリック・スピーキングの技術についてのビデオをみる。 http://bit.ly/PublicSpeaking - PF
4/12	交渉力の技術についてのビデオをみる	http://bit.ly/NegSkills - PF (7 min.) http://bit.ly/PF - 30Rock (from 30 Rock.. 5 min.)
4/17	プレゼンテーションの練習(プレゼンができるように用意をしてくること)	パブリック・スピーキングについてのビデオをみる。 http://bit.ly/DailyMotion - PF (5 min.) http://bit.ly/PublicSpeaking - Anx- - PF (14 min.)
4/19	ファイナル・プレゼンテーション	
4/24	ファイナル・プレゼンテーション	
4/26	最終講義:まとめ	レポート(それ以外の学年末試験はなし)

(表の欄構成については理解の便宜のため筆者が調整)

どんなことなのだろうか」「自分がしている仕事にどれだけのやりがいを感じているか」のような本質的な問いかけしてくる。ピーチングの授業では、自分にとっての障害が何であるかを見分け、他者のものさしではなく自分自身にとっての成功が何かをはっきりさせることを最初に取り上げ、そうした自分への問いかけによって「キャリアを積んでいながら、動機付けを定期的に問い直すことで、自分が投資している時間とエネルギーが納得のいくものであるかを自己評価すること」¹⁹⁾を学生に促す。

目的や問題意識がある学生は学習意欲や向上心が高い。自分に足りないものをどう学習し、どのように経験を蓄積していけるかを積極的に見出す。人生の目標はその時々の上昇的要因や人生設計の変化によって、軌道修正しないとイケないだろうが、自分自身が納得していることがとても大事だと、彼女は言う。

その後、ピーチングの授業は「ネットワークづくり：人脈、人間関係づくり」へと進む。これは、目標設定をした後、目標に到達するための手段である。「ネットワークづくり」は「まず人づきあいよく、新しい人に会うことに興味を持つことから始める」²⁰⁾ことだと、言う。どんな人間関係でも最初は何気ない会話から始まるものだが、ピーチングも重要人物とは日常的な会話からスタートさせ、その上で手紙や電話での交渉へと発展させるようにとアドバイスする。また、ネットワークの種類、メーリングリストについて等の詳細についても指導する。

「ファンドレイジング（資金調達）」の授業では、助成金情報のリサーチの仕方や申請書を書く際の注意点等が取り上げられる他、個人的にファンドレイジングする際の考え方や方法にも触れている。

このようにピーチングは、音楽の社会における、仕事との関わり方の曖昧な部分と面と向き合って、具体的な策をもって目標へと近づいていく方法と可能性を学生に提示する。学生が自己のプロモーションや資金調達に必要な資料や事例のデータを用いた指導を行ない、自己のプロジェクトや企画を社会に発信していくスキルを、実習を通して身につけさせていく授業を展開している。

2-3 ライネッケ・シュメルデ (Rineke Smilde)

1) 紹介

ライネッケ・シュメルデは、オランダのハンツ大学・王立クラウス音楽院にて、音楽の生涯学習 (Lifelong Learning in Music) の教授を務める。ハンツ大学とロイヤルアカデミーが連携して行なう研究プロジェクトグループ²¹⁾に所属し、彼らの研究課題でもある「社会に対応したキャリアパス形成に必要なスキル」についてや、「新しい観客を開拓するための音楽家の様々な役割について」等の研究活動に携わり、精力的に執筆活動を続けている。最近の著書には、Musicians as Lifelong Learners: Discovery through Biography (生涯学習者としての音楽家達：伝記を通しての発見) がある。

七

シュメルデの研究グループが提唱する「音楽家のライフロング・ラーニング (生涯学習)」とは、一般的な生涯学習とは異なり、「早いスピードで変わる社会の新しいニーズに対応できる音楽家の適応力や仕事能力の習得」²²⁾を目的とし、音楽家が生涯を通して音楽の仕事に従事することを可能にするためのものである。

2) 生涯学習者としての音楽家の習得すべき4つのスキル

シュメルデの研究グループの研究結果によると、音楽家が生涯学習者 (ライフロング・ラー

ナー）として生涯、仕事に従事するために必要なスキルは、「演奏のスキル」「教えるスキル」「ライフ・スキル」「情報交換のスキル」である²³⁾。ここで言う「ライフ・スキル」とは、生活していくために必要な一般的な能力を指し、次に挙げるものが含まれる。

・リーダーシップ・スキル (leadership skills)

コミュニティ全体が見渡せて、集合体全員のためになるように動くことができる能力。複数の関係者をマネージする能力や、経営力を発揮し、プロジェクトの目的を達成できるスキル。

「変化を取り入れ、それに対処することができ、対人関係のスキルを使って、人とのコミュニケーションやコラボレーションを円滑に運び、価値や動機付けを思案することができる」能力も含む。

・一般的な技能 (generic skills)

読み書きや計算能力やIT機器操作能力といった実務能力の他、パーソナルスキルや財務処理能力に加え、論理的な考え方（ロジック）や問題解決をする能力、創造的な発想力、地域社会に対する公共心を伴うソーシャル・スキル（社会技能）のこと等を指す。教える能力もここに含まれる。

・マネジメントやマーケティング能力

クライアントのニーズを分析し、それを届ける方法を開拓するビジネスのスキルや実務能力。

・健康管理に関するスキル (health skills)

演奏家は反復練習により、身体的な負担をかけ過ぎることによって、健康を損ねるリスクが高い。

健康管理や怪我予防をして自身の身体を整えるスキルが、長く演奏活動を続けていくために必要となる。

研究グループの調査結果に反して、実際に上記の4つのスキルをすべて習得できるようなカリキュラムを組んでいる音楽大学は少ない。実際、シュメルデの研究グループが「学生時代、もっと付けておきたかったスキル」²⁴⁾をヨーロッパの音楽大学で調査したところ、上位3位に「ライフ・スキル」が含まれていた²⁵⁾。音大の卒業生が社会に出たときに、芸術的な技術以外にこのようなスキルが必要だと感じることが多いことが伺える。

このような調査結果を受けてシュメルデらは、音楽家が生涯学習者であり続けるには「3つのタイプの学び」を織り交ぜていくことが必要だと言う。3つの学びの1つ目はフォーマルと呼ばれ、従来からある音楽大学やその他の音楽教育機関等での一般的な教育である。それに加え、ノン・フォーマルとインフォーマルと呼ばれる2つの学びの環境をつくっていくことが重要だと唱え、そうすることによって社会の様々なコンテクストに対応できるスキルを有した人材育成が可能となると提言している。

3) 3つのタイプの学びについて

八 まず3つのタイプの学びの特徴をそれぞれ述べる。

①フォーマル (形式的)

まず、フォーマルな学びは、学校やその他の組織的な学びの場で行なわれる。カリキュラムがきちんと構築され、何をどう学習するかが、はっきりとわかるようになっている。目的とゴールがきちんと設定されていて、成果も示しやすい。学生は先生からの教えを受け取るという受動的なものが多いことも、この学びの特徴である。

②ノン・フォーマル (非形式的)

ノン・フォーマルは、課外活動及び実習型の授業で、学校教育の一環として校外で行なわれる組織だった学びを指す。特定の場所で、特定の対象者をターゲットにしたものが多く、その時々学生のインプットに応じて変化するため、内容はフレキシブルなものが多い。フォーマルな学びは、ゴールがはっきりしていて目的を達成することが重要なものに対して、ノン・フォーマルな学びは、ゴールにたどり着くことよりも、よい体験をすることに重きがおかれる。教育実習、文化祭、ゼミ単位での地域に根差した活動、その他の学生主体のイベント、地域や近隣住民に向けた校外活動等がこのタイプの学びに含まれる。

③インフォーマル（日常的／非公式の）

3つ目の学びであるインフォーマルな学びは、自身のモチベーションが原動力で、一般的には、学校や社会活動以外の実生活の中で行なわれる。学習期間の設定や方法、目標、カリキュラム、教材は特になく、学ぶ本人による自主的な学びである。家族や同じ価値を共有する友人や同僚と一緒に学ぼうという共同作業が多い。

幼少期に家庭の中で親や兄弟から影響を受けて、習い事としてレッスンを始める前の自己流の音楽との関わり方や、音楽家同士が平等な立場でかわす音楽的交流は、インフォーマルな学びの例として挙げられる。授業やレッスンの枠組みの外で楽しむ即興演奏も、この典型的な例である。即興をするということは、自分の内面を表現したり、相手と音楽による会話をしたり、新しい音をつくり出したりして、自分の音を強く意識させられると共に、共演者と音に対する感性を共有するという社会的な面もある。

インフォーマルな学びには、このように音楽での遊びが大事な要素となる。自分のために、自分が決めて自分がやりたいくで行なう、自分だけの音楽との特別な関わり方である。

4) 今後の音楽大学が抱える課題

シュメルデらの研究グループの研究結果から、未来を歩む音楽家を養成する音楽大学の教育の場には、学生がリーダーシップを発揮できるノン・フォーマルな学びの場を、より多くつくる必要性があることが浮き上がってきた。また彼らは、初心者であれプロであれ、どの成長過程においても個人的、芸術的、そして職業的に成長するためには音楽の生涯学習者としてフォーマル、ノン・フォーマル、インフォーマルの3つのタイプの学びをすることが不可欠だと唱える。フォーマルとノン・フォーマルを連携させた新たなカリキュラムの開発には、実社会で活躍している卒業生の声を聞き、彼らから学ぶ体制を大学に導入する案も大変有益な研究成果だ。そしてシュメルデらは、音楽の学びは大学卒業時に完了するのではないので、今後音楽大学は更なる芸術的スキルの向上と共に、生涯というスパンを視野に入れた一般的な知識とスキルを含めた職業技能を習得できる教育機関となることが求められると言う。そのためにも、教員側が一生涯学習者として自身の職業技能を高め続けることは元より、今後は大学において、複数の教員や職員を導入した指導体制²⁶⁾を取り入れるなどして、広がりつつあるグローバル社会に適応できる人材育成を多方面からサポートする体制づくりが期待される²⁷⁾。

九

3 音楽家のキャリアに関する考察と今後の課題

3-1 考察

これまで紹介してきた事例を基に、①現代の演奏家に求められるスキル、②そのスキル育成に音楽大

学が果たす役割、③ノン・フォーマルな学びの重要性の3つの観点から考察を行う。

1) 現代の演奏家に求められるスキル

社会の変遷に伴って従来の音楽家のキャリアは変化しつつある。音楽のキャリアのことを、「誰に尋ねたらよいのかわからない」「将来の展望が建てられない」「本当は伴奏をしたり、室内楽をしたり、子供が好きだから音楽を教えたいが、不確定要素が多すぎてどこから着手してよいのかわからない」と思っている学生や音楽家は多いのではないだろうか。

現に、学生の中には、先生が大学院を薦めるが自分は特に乗る気でないものや、海外留学をしたいが、語学力不足や情報不足が理由で踏み出せないもの、本人の意志に反し親の勧めで一般企業への就職をするものなど、自分自身が何かをやりたいと思う気持ちよりも、他の要因によって動かされている学生が多くいるように感じる。また、自分の位置が確保できている音楽家ですら、どのようにキャリアを形成していくかという具体策を考える段階になると、自分の音楽的知識や技能をどのように社会に送り届けたらよいのか、という具体案については、曖昧に過ごしている場合が多い。また場合によっては、ビジネスとの関わりを認識することすらしていない。

そうした現状に向き合って、シュメルデは音楽家が社会に目を向けていくことを促すと共に、音楽家自らが、社会の需要がある場所を自身で開拓し、活躍できる場所を見出していく手段として、音楽の技術が優れているのみでは不十分であり、それ以外のスキルを生涯学習を通して学び続けることの重要性を説いている。彼女は、大学側が学生に提供するスキルとして「演奏技術のスキル」以外のアート経営やアートマネジメント能力、リーダーシップ、学際的研究、リサーチ、編曲や即興演奏の技能、一般教養のスキルが大切だと言い、それらの能力を学習するには、従来からあるフォーマルな学びの他、ノン・フォーマルな学びとインフォーマルな学びをミックスすることが必要だと提言する。

最近の日本の音大生の多くはジャンルを跨いだ音楽を好んで聴いたり、演奏したりする傾向があるように感じる。ポピュラー音楽の要素をクラシックの中に見いだしたり、ジャズでの即興をクラシック音楽に取り入れたり、オペラとミュージカルを比較したりして、インフォーマルな学びを、フォーマルな学びと混ぜていくことは、音楽での活動の場を広げると共に、一生涯音楽を学習していく原動力となるであろう。

2) 多様なスキル育成に音楽大学が果たす役割

ビーチングやアンダーコフラーらも、これからの音楽家は演奏技能以外の多様なスキルをつけていけるように、大学におけるアントレプレナーシップ教育に、力を注いでいる。音楽のキャリア形成における具体的な方策を、一つずつできることから選び出し、問題点を小さく噛み砕き、目標達成までの道筋をつくる教育を実施している。

具体策の一例としてビーチングの授業でも取り上げているトピックの一つである「ファンドレイジング」を挙げる。その言葉自体、日本の学生には馴染みがあまりない。日本には金銭的なことを、開けっ広げにしないことが美德であるという風潮があるが、それはお金に関して疎くなってよいということではないことは言うまでもない。多くの学生は、学園祭で屋台を出して食べ物等を販売したり、自分が出演するコンサートのチケットを売ったりする経験はあるだろうから、こうした活動と関連づけて、資金調達者にもその運動の根拠や目的をはっきりさせれば、立派なファンドレイジングの実習授業となりえ

るだろう。

お金の出所がどこで、どのようなお金の流れがあるのか、その中でどのような人やものが関わっているかを理解することによって、人に対する感謝の念がより深まるだろうし、社会との関わりをより強めることになろう。また、資金提供された場合、そのお金に対する責任が発生するので、自分の利益追求に留まるのではなく、資金提供者や社会にとっても有益なものをつくる公益的活動へと視点が広がるきっかけとなりえるのではないだろうか。このように、演奏家が個人の音楽活動の枠組みから出て、社会に視点を向けていくことによって、社会の需要がある場所を自身で見出していくことが可能となりえる。

このようなアントレプレナーシップ教育を推進しつつも、今回本論文で取り上げた3人は決まりきったキャリア教育のモデルを提言しているのではなく、今後も音楽大学にアントレプレナーシップ教育のコースを設置するか、それとも他の既存の授業と組み合わせるか、それを必修にするか選択にするか、カリキュラムの中にアウトリーチをどう組み込むか、組み込まないか等、今後も議論を重ねていく課題は残されているとし、今もなお音楽におけるキャリア教育の推進や、音楽家の活動の場の開拓に、多くの研究調査を重ねている。

3) ノン・フォーマルな学びの重要性

シュメルデらの区分によるノン・フォーマルな学びは、学校という一種の守られた場所から一歩外に出て、実際に自分の音楽を社会に発信することであるが、それをするためには、自分や自分の演奏のことだけではなく、相手の立場に立って、観客にとってメリットのあるプロジェクトを企て、色々な立場や職種の人達と関係を築かねばならない。そのため、プロジェクトを実現させる過程において、リーダーシップ、マネジメントや実務能力が磨かれる。また、演奏技術はもちろん、観客層を音楽に招き入れるために必要な、コミュニケーションのスキルも磨かれる。観客は音楽という商品を求めているのではなく、音楽を通してよい体験をすることを求めている。そう考えるならば、音楽家はクラシック音楽に馴染みがない観客にも、音楽とよい体験や音楽とよい関わりを持ってもらえるように、演奏家であっても、時には、作曲、編曲をしたり、即興演奏や指揮をしたり、マネージャー、インスペクター（インペク）、教師、ティーチングアーティスト等の役をこなさないといけない。

今後は、学生に実社会で遭遇するであろう様々なコンテクストに似せた現場を大学が用意したり、大学が他の職業団体とパートナーを組んで学生にインターンをさせる等、実習経験の場の更なる拡大が望まれる。同時に、学生のノン・フォーマルな学びでの実践体験を、いかにフォーマルな学びで習得する知識や技術につなげていくか、有効的に機能する連携型カリキュラム構築が、重要となるだろう。

ノン・フォーマルな学びの成果を目に見えるかたちで示すのは難しいが、こうした学習中に、学生を放置するのではなく、学生の学びを総体的に評価できるアドバイザー的存在を配置することによって、学生の内面的な発達や学習意欲の向上という成果が多いに期待できるであろうし、またそうした学びを通して、流動的な社会に対応できる音楽家を育てる教育が実現できるのではなかろうか。

3-2 今後の課題と結び

アメリカには、二通りの音楽大学がある。イェール大学やインディアナ大学等、総合大学の中に音楽

学部がある音楽大学と、ジュリアードやカーティス等の芸術分野を重んじる音楽院と呼ばれる音楽大学である。総合大学の一部としての音楽大学が一般教養科目を重んじることは当然といえるが、ジュリアードのような音楽院でも、リベラルアーツ（教養科目）を重視する傾向にある。ジュリアードの学長であるポリシーは、1984年に就任して依頼、リベラルアーツを強化し、技術訓練に偏重していた従来のカリキュラムを大きく見直すと共に、学生と教員の意識改革を進めてきた。それは、音楽を総合的に捉える力を養い、伝達方法、企画能力と共に、音楽以外の他分野と関連付ける能力を開発することが、社会に開かれた音楽活動を推進する教育だと考えたからである。シュメルデの所属するオランダの王立クラウス音楽院は総合大学であるハンツ大学の一部である。

翻って我が国の音楽大学は、ほとんどが音楽の単科大学もしくは芸術大学である。昨今では、総合大学と提携を結び、学生が特定の授業を相互に受講できるような体制をとっている音楽大学もあるが、社会全体の中での音楽大学の位置づけは、一般大学とは異なっている。音楽大学の中だけ、あるいは学内だけに閉じた教育活動に陥ることなく、音楽家が社会に果たせる役割を拡大させて行くための教育機関として、今後音楽大学は音楽大学の枠組みを越えたノン・フォーマルな学びを見据えて行かなくてはならないのではないか。

そうした考えの基に、音楽大学の枠組みから地域コミュニティに向けて発信するアウトリーチや地域活動等を通して、広く社会の中での立ち位置を明確にさせることが重要だと考える。そのためには、音楽の技術を付ける音楽大学から、社会全体の中の音楽の役割を表現できる能力を付ける教育機関へと移行し、様々な職種とのコラボレーションを探り、大学におけるコミュニティ活動実践型のノン・フォーマルな学びを強化していく体制づくりとプログラム開発が必要だといえよう。また、そのためには、より多くの音楽を通したコミュニティ活動の研究と実践が望まれるであろう。

最後に、シュメルデらの研究グループの言葉を引用して結びとする。

生涯学習とは、自分にもっともふさわしい職業を見つけることでもある。これからの音楽大学は、芸術の実験室として、それぞれの学生が自身の活動領域を見つけ、夫々の能力を生かしていく機会を提供する場でなければならない。新しい道を模索し、新しい可能性を見い出すことが音楽家のトレーニングの一部となったとき、あらゆる変化に対応していくことは、不安材料だと感じるよりもチャレンジとして捉えられるようになるだろう²⁸⁾。

付記 本研究は科学研究費（80587999）「音楽におけるアウトリーチ及びレジデンシー活動におけるティーチングアーティストの役割」の助成を受け行なわれた。

注

- 1) いわゆるポートフォリオ型キャリアを指す。
- 2) 久保田慶一 2008『音楽とキャリア』東京：スタイルノート。
- 3) Beeching, Angela M. 2004 *Beyond Talent: Creating a Successful Career in Music*. Oxford: Oxford University Press, pg. 188. [ピーチング、アンジェラ／箕口一美訳 2008「Beyond Talent日本語版—音楽家を成功に導く

12章—」訳 東京：水曜社, pg. 210]。この本の翻訳に関しては一部を変更して使わせて頂いている。

- 4) 1995年に当時ニューイングランド音楽院に勤務していたアンジェラ・ビーチングとマンハッタン音楽院の卒業生関連の事務職にあったジョン・ブランチャードが設立した。
- 5) アート・エデュケーションの第一人者であるブース氏によるとteaching artistとは、「技術面を越えた体験型の教育を施すことで、芸術的な触媒作用を促すことを職能の大切な部分として積極的に取り入れているアーティスト」を指す (Booth, Eric. 2009 *The Music Teaching Artist's Bible*. New York: Oxford University Press, pg. 3.)。
- 6) entrepreneurとは、一般的に「アントレプレナー」と言う。「事業を起こす人。起業家。企業家。」と訳される。
- 7) Open Space Technology (OST) とは、参加者が協議事項や議事日程を会議の中で構築する手法。このメソッドはどんなサイズのグループにも使え、複雑で重要な問題や論点の意義ある解決策をすばやく導き出すことに効果的。今回の会議では、希望する人が、話し合いたい議題を紙に書き、参加者全員が出揃ったトピック中で興味があるトピックを選び、分散して会議をするというものだった。
- 8) アイディア・マーケットで話し合われたものをまとめたものは、次のサイトからダウンロードしてPDFファイルで読むことができる。
<http://www.musiccareernetwork.org/index.cfm> (Conference 2013 reports)
- 9) The Royal Conservatoire in The Hague (NL), The Iceland Academy of the Arts (IS), The Prince Claus Conservatoire in Groningen (NL), The Royal Conservatoire in Stockholm (SE) Swedenの4大学が提携校を結んで、新しい聴衆の開拓と改革的な実践をする大学院プログラムを展開している。<http://www.jointmusicmaster.org/>
- 10) <http://www.artsjournal.com/state/stat-of-the-art/>
- 11) 前掲ウェブサイトより“The Great Disconnect Revised” (April 6, 2011)
- 12) 同上ウェブサイトより“Does Sustainability Mean Artistic Success?” (February 9, 2010)
- 13) 同上ウェブサイトより“Arts Entrepreneurship —Lack of Imagination, lack of Chutzpah?” (February 25, 2011)
- 14) 同上ウェブサイトより“Arts Entrepreneurship —The Idea Formation Conundrum” (June 6, 2010)
- 15) 同上ウェブサイトより“Defending Arts Entrepreneurship” (December 5, 2011)
- 16) Beeching, op.cit. [ビーチング前掲書]。
- 17) 2013 Spring-セメスター“Practical Foundation: Entrepreneurial Leadership Skills”シラバスより。
- 18) ビーチング前掲書, pg. 6-7.
- 19) 同上書, pg. 148.
- 20) Beeching, Angela M.. 2010 *Beyond Talent: Creating a Successful Career in Music*. Oxford: Oxford University Press, pg. 21.
- 21) joint research project of the Hanze University of Applied Sciences in Groningen (Prince Claus Conservatoire) and the Royal Academy of Fine Arts, Design, Music and Dance in The Hague (Royal Conservatoire)
- 22) Smilde, Rineke. 2009 *Musicians as Lifelong Learners: Discovery through Biography*. Delft: Eburon Academic Publishers.
- 23) Mak, P., Kors, N. and Renshaw, P. 2007 *Formal, Non-formal and Informal Learning in Music*. Groningen/The Hague: Lectorate Lifelong Learning in Music, pg. 5.
- 24) Smilde, op.cit., pg. 41.
- 25) ちなみに「学生時代、もっと着けておきたかったスキル」のその他の項目は、「即興演奏や現代音楽を弾くスキル」「室内楽や大きめのアンサンブルで演奏するスキル」となっている。
- 26) シュメルデ氏らの研究グループでは、このような指導体制をco-mentoringと呼んでいる。
- 27) シュメルデ氏が、大学に期待することとしてこれら以外に「即興演奏を音楽の基礎訓練に取り入れること」

も挙げている。

28) Mak, P., Kors, N. and Renshaw, P., op. cit., pg. 25.

引用・参考文献

Beeching, M. Angela. 2010 *Beyond Talent: Creating a Successful Career in Music*. Oxford: Oxford University Press.

Beeching, M. Angela. 2004 *Beyond Talent: Creating a Successful Career in Music*. Oxford: Oxford University Press.

[アンジェラ、ビーチング／箕口一美訳 2008 「Beyond Talent日本語版—音楽家を成功に導く12章—」 訳 東京：水曜社]

Booth, Eric. 2009 *The Music Teaching Artist's Bible*. New York: Oxford University Press.

Booth, Eric. "First International Teaching Artist Conference (2012)" インターネット

<http://www.seanse>. (2013/4/17にアクセス)

Mak, P., Kors, N. and Renshaw, P. 2007 *Formal, Non-formal and Informal Learning in Music*. Groningen/The Hague: Lectorate Lifelong Learning in Music.

Smilde, Rineke. 2009 *Musicians as Lifelong Learners: Discovery through Biography*. Delft: Eburon Academic Publishers.

Undercofler, James. "State of the Art: Entrepreneurship in the Arts" インターネット

<http://www.artsjournal.com/state/stat-of-the-art/> (2013/4/25アクセス)

久保田慶一 2008 『音楽とキャリア』 東京：スタイルノート